「日橋川」「大川」とは『新編会津風土記』
「揚（あがの）川」阿賀川とは『会津鑑』

日橋川

『新編会津風土記』に、日橋川は、江戸時代前半までは、猪苗代湖から出る部分を「戸ノ口川」、磐梯町大寺付近を「新(日)橋川」、会津若松市河東町付近を「堂島川」、鶴沼川(現阿賀川)と合流すると「大川」、只見川と合流すると「揚(あがの)川」と呼んでいたとあります。

只見川

『会津鑑』揚川（阿賀川）は、尾瀬沼から只見までを「揚川」、只見から片門までを「只見川」、片門より下流を「揚川」と呼んでいました。只見川は、柳津虚空蔵堂下にある「畳岩の川」が由来。

阿賀川

「大川」は田島から県境までを「荒海川」、田島から湯野上のまでを「大川」、湯野上から本郷までを「鶴沼川」、本郷から下流を「大川」、北会津付近を「蟹川」、佐野付近を「佐野川」と呼びました。本郷から神指町高瀬に分流の「応湖川」がありました。宮川の下流の「鶴沼川」は、湯野上から来た「鶴沼川」の名残りです。

「阿賀川」は、明治政府の工部省が、西会津付近の呼び名をそのままに付け、現在に至っています。

会津若松市北会津町真宮に残る和舟
全長　9.53メートル

『会津鑑』

揚川源當邑領分尾瀬沼出同郡只見村揚川云只見村下流只見川云河沼郡片門村下流又揚川云同郡宮月村至日橋川合是下流凡揚川云毀〻諸水合而越後国新潟至海入

駒嶽傳在大桃邑記

経路當邑至小瀬峠廿四里此間駄馬不通自此南経上野国荒井通沼田

『新編会津風土記』

日橋川（ニッハシ）

水源は猪苗代湖なり耶麻河沼二郡の間を流れ鶴沼川只見川と落合蒲原郡を經て海に入る會津中大小の諸水此川に入らざる者なく會津第一の川なり古歌に讀る會津川も是なり只見川と落合てより下を揚川（アカノ）と云れば、葦名の軍勢敗れてこの橋を渡らんとて、走り來りし者ども溺死すること數をしらず、されば大旱のとき水落れば往往兵器の朽損じたるを得るといふ、昔は日橋を新橋に作れり、鹽川組落合村にて新橋を架してより今の文字にあらためき、

り注ぐ、新宮村より木曾組に入り、船岡村の西にて一戸川これに合し館原村の南にて只見川に合し、水流益さかんにして大谷組に入り、西海枝村の端村一竿の邊にては兩岸より岩石相つかね、廣僅二十間計、戸中村より吉田組に入り杉山村の東にて奥川來り注ぎ、西流して越後國蒲原郡鹿瀬組に入る、此川に五の小名あり戸口村の邊を戸口川と云、大寺村の邊に至り日橋川と云、赤枝村より下を堂島川と云、鶴沼川に合して大川となり、只見川に合してより揚川と云、凡てこれを日橋川と云、耶麻河沼二郡の間を流れ、曲折數廻なれども大抵東より西に流る、封内の諸流皆これに會す、封内第一の大河にて、所謂會津川なり、會津川をよめる歌古今六帖に

心にもあらでわたりし會津川憂名を水にうつしつるかな　貫之

図・写真・文　©石田明夫2017　問合せ　TEL・Fax 0242-24-3423　090-1378-8087
メール・ホームページ「会津歴史観光ガイド協会」で検索